

おそろい兄妹・3　くユマとエマく　(下)　試読版

目次

承前 ボーダー柄ボディースーツ

第六章 かぐや姫へようこそ

- (一) さくらんぼ小物セット
- (二) リボンブルマードレスセット
- (三) ジョーゼットお花畑ベビードレス

第七章 お誕生日をもう一度

- (一) ピンクシジードレス＋フリルハーネス
- (二) フォーマルスーツ風ロンパース

第八章 終わりのためのバースデイ

- (一) ピュアセレモニードレス
- (二) 胸ハートサロペットセット

結 お澄ましチェックワンピース

承前 ボーダー柄ボーディースーツ

早春の日々は足早に過ぎ、四月も残すところ一週間となっていた。桜はもうとつくに散り、陽気もすっかり春本番。むしろ今年には馬鹿天気のせいで、夏日に届こうかという日さえ多かった。

そんな午前中——高台に造成された新興住宅街の一角にある朝倉宅二階で、ベビールームからベッドが一台、解体されて運び出されていた。

「これでよし、ね」

動きやすい七分袖カットソーにパンツルックの女性が、腰に手を当ててベビールームを見まわし、すっきりした様子で言う。

彼女は海外への赴任が多く不在がちの夫に代わって、この家を守る女主人——そしてまた、女兒服ブランド「ANGERIC BABY」のデザイナーであり、二児の母でもあった。年齢的には四〇に近いのだが、一見するととてもそうは見えない。いまだに二〇代後半に間違えられる若々しさだ。それでいて胸や腰回りも、生娘には無い肉付きがどこか背徳的な色気を放っていた。

そしてその隣で、

「ええ、広々しましたね」

答えたのは、制服のような水色のシャツと、紺のプリーツスカートを着た少女——一条璃那。前髪を後ろにヘアクリップで固定したショートボブに、赤いフレームの眼鏡、にやりと笑うと覗く鋭い前歯がトレードマークだ。

こちらは十八歳で、専門学校生の一年生なのだが、身長が低いのと、表情が悪戯めいているせいで年下にみられることが多い。

二人とも袖をまくり、秀でた額にはうっすらと汗がにじんでいた。

そのすぐ横で、解体されたベビールームの主である少女——朝倉絵麻は、まだ今一つよくわかっていない表情で母親を見上げていた。

「んー？」

身長八〇センチ半ばほどで、さらさらとした絹糸のような髪をおかっぱに切りそろえ、整った顔立ちに、くりくりとした利発そうな目元。赤いボーダー柄のカットソーに、ボトムスはデニムのスカートを穿いていた。

つい最近まで「いやいや期」真っ盛りで、何かにつけて母親の言うことを「いや、いや」と拒絶していた彼女だったが——今では嘘のように大人びて、「お姉ちゃん」然とした雰囲気をもっていた。

おむつとベビー服もつい先日卒業して、穿いているのはトレーニングパンツ。他の同年代

の少女に先駆けておむつが外れたことが、彼女の自信の源になっているようだった。

もつとも、まだまだ事理弁別能力を具えるには早すぎるようで、

「エマのベッド、ないないしちゃったの?」

「ふふっ、違うわよ。エマちゃんはお姉ちゃんだから、ベビールームじゃなくてお姉ちゃんの部屋なの。さ、こっちにいらっしやい」

母親はそう言って、絵麻を抱き上げて部屋を出てゆく。

ややあって、ドアの向こう——ベビールームの向かいに位置する、絵麻用の部屋から、

「わあい！ エマのおへや！ ベッド！」

嬉しそうな絵麻の声が響いてきた。

勉強机や本棚、普通のベッドなどがある普通の子供部屋に、すっかりはしゃいでいる。

娘が成長して子供部屋に移り、ベビールームから使わなくなったベッドを運び出した——

それはごくごく、ありふれた光景のように見えた。

だが——

「んふふ、どう？ お姉ちゃんが、ベビールームを卒業しちゃう気分は?」

部屋に残された一条璃那は、部屋の隅に掛けていたグレイのパーカーを羽織りながら言うのと、いまだ部屋の中央に鎮座するベビールームを見下ろした。

解体され、運び出されたベビールームではない。

それよりも一回り大きい——大の大人が寝転がれる、大人用のベビールームを。

「んっ……」

そしてそこには、このベビールームのサイズにふさわしい、一六〇センチ半ばほどもある「赤ちゃん」が、頭上のメリーサークルを見上げるように仰向けになって寝転がっていた。

非常に可愛らしい、絵麻が成長すればこうなるだろうと思わせる美少女めいた顔立ち。絵麻と同じようなボーダー柄の肌着——と言ってもシャツではなく、クロツチ部分をスナックボタンで留める、ベビー用のボディースーツを身につけている。こちらは水色のボーダーで、襟ぐりは白い台襟。ふちがスカラップになっていて、まるでよだれかけのようにも見えた。頭には、こちらも白いスカラップのふちがついた水色のベビー用ボンネットをかぶり、前髪が一房、おでこにかかって覗いている。

璃那の口ぶりからすると絵麻の弟か妹のようであったが、もちろんそんなはずはなく——

「んふふっ、まだまだ『妹』にはなり切れてないみたいね。もうゆまちゃんは、高校を卒業したお兄ちゃんじゃなくて、絵麻ちゃんの可愛い『妹』のゆまちゃんなんだよ?」

「う——」

ゆまちゃん——いや、絵麻の兄であり、一条璃那と同じ年の幼馴染であり、この春に高校を卒業した受験浪人でもある朝倉雄馬は、さらに顔をくしゃくしゃにゆがめながら、おしゃ

ぶりを噛み締めた。

発端は、この四月。

「いやいや期」に入った妹に着替えなどで言うことを聞かせるため、母親が苦肉の策として「お兄ちゃんが同じことをすれば、絵麻ちゃんも同じようにしてくれるかも」と考え、浪人生という身の後ろめたさもあって雄馬が承諾したのがすべての始まりだった。長くても四月いっぱいと期限を切り、妹が「いやいや期」を脱したら解放される——所詮はひと月程度のことと考えていた雄馬は、想像以上に羞恥に満ちた「おそろい」生活に、次々に少年として、兄としての尊厳を奪われていった。

着せられるのは、ロンパースやブルマードレスなどのベビー服——それも妹と「おそろい」の、スカートやレース、フリルがついた少女用のものばかり。いちおう、雄馬のほうが「お兄ちゃん」ということで、絵麻のピンク・赤系に対して水色・青系の配色を振られることが多かったが、そんなのは何の慰めにもならず——それどころか、かえって恥ずかしさが増すだけであった。

ベビー服を着せられるのは、なにも家の中だけではない。絵麻のお散歩には当然のように一緒に連れて行かれ、顔見知りのご近所さんや、かつての同級生たちも多く住んでいるこの住宅街のあちこちを、妹と「おそろい」のベビールックで歩き回らされていた。「雄馬が赤ちゃんとしての生活を送っている」という噂はあつという広がり、今ではこの住宅街で知らぬ人もないほどになっていた。

そのため、ベビールックで外を歩いていても通報されるなどの心配はなかったのだが——雄馬が恥ずかしい思いをすることに、変わりはない。

下着も当然、絵麻と「おそろい」。最初は少女用の紙おむつから、次第に布おむつに変わり、排泄すらも、おむつの中にするように命じられた。

(なにもここまでしなくても——)

そう思う雄馬であったが、母親と、その共犯者である幼馴染の一条璃那には逆らえず、おしっこから始まり、やがて大きいほうまでおむつの中に排泄するようになっていた。汚してしまったおむつや下半身は璃那の手によって綺麗にされ、雄馬はますます、彼女に頭が上がりなくなつた。

同時に、また——

(んふふっ、おむつを当てるときに邪魔だから、これはちっちゃくしてあげないとね)

そう言って、彼女に。ペニスをしごかれ、射精の快感をも与えられるうち——いつしかおむつと、排泄と、快楽とが分かちがたく結びつき、おむつの中におもらしする行為そのものに、快感を覚えるようになってしまった。

さらにはおむつの中に排泄を繰り返すうち、雄馬の体は次第に排泄を我慢することができなくなり——気付けば妹以上におもらししてしまう体になっていた。いわゆる「逆トイレ

トレーニング」である。

服装と、肉体的変化は、やがて精神にも大きな影響を及ぼすようになる。

当初は恥ずかしいばかり、嫌なばかりだった妹との「おそろい」生活。しかし妹と一緒に赤ちゃんとして可愛がられるうちに、まんざらでもない気持ちさえ芽生えるようになっていた。

(こんなに気持ちいいなら、おむつ生活も、悪くないかも……)

そして、ついに昨日。

久しぶりにおむつなしで——といっても少女用のインゴムショーツだったが——公園に出た雄馬は、そこでもまたおもらしをしてしまった。妹はおもらししなかっただけにいっそう恥ずかしく——さらにこの出来事は、雄馬にさらなる破局をもたらした。

母親からは「おもらししちゃったから、これからはゆまちゃんが妹ね」と言われ、妹からは「おにーたんとおちよるいはいや!」と言われ、璃那からは「私の『娘』になってちょうだい」と言われ、さらに雄馬自身も精神を保ちきれずに赤ちゃん返りしてしまった結果——ついに兄妹の「おそろい」生活は、始まったときには予想もしなかった形で終わりを告げた。

すなわち——「おそろい」から「あべこべ」へ。

兄である雄馬のほうがおむつの取れない赤ちゃんとなり、絵麻の「妹」として、璃那の「娘」として、少なくとも今月いっぱい赤ちゃん生活を送ることが決定して——半月以上にわたるベビー女装生活の末、ついに雄馬の心が赤ちゃんに堕ちたのだった。

今日のベビーベッド解体と、絵麻が子供部屋に移っていったのは、まさに兄妹の逆転を踏まえてのことである。いま雄馬の口にあるおしゃぶりも、昨日絵麻からプレゼントされたお下がり——「姉妹」の序列を象徴するものだった。

サイズとしては小さいおしゃぶり。しかしそれだけに、唇にかなり力を込めて啜えないとすぐ外れてしまうため、その存在を強く意識してしまう。加えて、かつて妹が使っていたおしゃぶりを啜えていると考えると、そこにしみこんだ妹の唾液が、口の中に広がるような錯覚があった。

しゃべることもできないまま口の中に湧きあがってくる唾液を飲み下すと、いっそう無力感が強くなり、自分が赤ちゃんになってしまったことを強く認識する。

「絵麻ちゃんは偉いよねー。あつというまにおむつ離れして、ベビーベッドも卒業しちゃったんだから。ね、ゆまちゃん」

璃那のおかしそうな声に、恥ずかしそうに身悶えし、顔を真っ赤にする「赤ちゃん」。

しかし、口に含んだおしゃぶりのせいで何も言い返すことはできない。

(ああ、ついに絵麻は——エマお姉ちゃんが、卒業しちゃうんだ——)

「ふふっ、これでこの部屋は、ゆまちゃんだけのお部屋ね。どう？ 嬉しい？ それとも、ちよつと寂しい？」

「んっ……うん……」

「ママ」の揶揄に、ベビーベッドに寝たままの雄馬は素直にうなづく。不思議なほど、悔しさや恥ずかしさはわいてこなかった。元いた自分の部屋が恋しいとも思わず、まるで遠い夢の中で過ごしていたような、漠然とした感覚しか残っていない。

今の雄馬にとって「自分の部屋」は、パステルカラーの内装にベビー用家具の並ぶ、このベビールームに他ならないのだ。

「んふふっ、素直でいい子。こんなかわいい『娘』になってくれて、ママ、嬉しいわ」

璃那はそう言いながら、雄馬のおむつ交換を始める。絵麻のベビーベッドを運び出すまでの間に、おもらしをしてしまったのだ。

それを璃那に交換してもらっているところに絵麻が入ってきて、

「ゆまたん、はやくおもらちなおるといいね」

大人びた表情で雄馬を見ながらそう言った。

ここ数日は、寝るときだけはおむつをつけているものの、昼間はすっかり卒業してトレーニングパンツになり、それを濡らすこともほぼなくなっていた。雄馬よりすっかり「お姉ちゃん」だ。

（「絵麻お姉ちゃん」はおむつも、ベビールームも卒業してるのに、俺はまだおねしょおむつを「ママ」に取り換えてもらってる……）

（もう、俺——ううん、ゆまたんのほうが、ずっと赤ちゃんなんだ……）

（なのに——なのに、ぜんぜん悔しいとも思わなくて……本当に、気持ちまで赤ちゃんになっちゃったみたい……）

ぼんやりと考えながら、ベビーベッドの上でおむつを外して下半身を拭いてもらい、新しいおむつを当てようというところで、

「さ、せっかくママの娘になってくれたことだし」

一条璃那は、赤いフレームの奥で目を細める。

ここ一か月の間ですっかり雄馬のお世話が板につき、さらに昨日のやり取りで「ママ」になったこともあってか、もはや姉というより母親のような貫禄が身についていた。

「どうせだから、今まで以上に赤ちゃんにしてあげる」

そう言いながら彼女は手を伸ばし、雄馬の口からおしゃぶりを外す。

とつぜんに異物感が消え、自由になる口舌。おしゃぶりから唇に光の糸が一筋、雫をまといつかせて引かれ、そのまま胸元に落ちて小さなシミを作った。

雄馬は困惑しながら、妹とほとんど変わらない舌足らずな口調で、一言一言、言葉を模索するように口を開く。



「んっ……で、でも、これ以上、どうやって……？」

「今までは、エマちゃんとおそろいだっただけでしょ？」

璃那は言う、クローゼットからサクランボ柄のおむつカバーを取り出した。

「せっかく『あべこべ』になって、あたしの——ママの『赤ちゃん』になってくれたんだから、もつともつと、赤ちゃんになって欲しいんだ。そのためにまず、今までにないくらいたっぷりおむつを当ててあげましょうねー。ね、ゆまたん」

さらにベビーベッドのすぐそばにあるキャビネットから、たっぷりとおむつを取り出す。

「今日からはちよっと、枚数も多めにするわよ。そうね……いつもが五枚だから、倍の一〇枚、当てようかしら。んふふっ、たっぷり当てたほうが、お尻が真ん丸に膨らんで可愛いでしょ？」

「う……」

そんなに当てたら、歩けなくなってしまおう。前に璃那の学校に連れて行かれたとき、一〇枚できえ歩きにくいことこの上なかったのだ。

だが、雄馬は——

「う……うんっ」

まるで赤ちゃんになりきってしまったように、拙い口調でうなずいてみせた。

璃那は一瞬、驚いたように目を丸くしてから、

「そっかぁー……ふふっ、いいいいこ。そうだよねー、ゆまちゃんはふかふかおむつ、大好きだもんねー」

「んっ……ゆまたん、ふかふかおむつ、大好き……」

赤ちゃんになりきって、答える雄馬。

半分はやけくそという演技というか、ほとんどノリと勢だったが、口にした途端にいっそう赤ちゃんになってしまったような安心感をおぼえる。

(やばい、これ、クセになるかも……)

「んふふっ、じゃあ、そんなおむつ大好きなユマちゃんのために、たっぷりおむつを当ててあげましょうねー」

雄馬の足元におむつカバーを広げ、そこに布おむつを重ねてゆく。いつもの倍、一〇枚ものおむつが重なると、かなりの厚みになった。

「これでよし、と。じゃあおしりをあげてちょうだいねー」

「んっ……」

雄馬は大人しく、璃那の手が膝裏に潜り込んで持ち上げるのに任せる。ペニスがおへそに向かってだらんと垂れ下がり、足側にいる「絵麻お姉ちゃん」からは、陰囊からお尻の穴まで丸出した。

いつもならここで、璃那が反対側の手でおむつを動かすのだが——いつの間にもやら戻ってきて、じっと二人を見ていた絵麻がとことこと近づいてくると、小さな手でおむつカバーを掴んで、えっちらおっちらと動かし始めた。

「あら、エマちゃん、お手伝してくれるの?」

「うん! エマたん、おてちゅだいすゆ!」

「んふふっ、ありがとう。それじゃあ、そのおむつカバーを、ゆまちゃんのお尻の下まで動かしてくれる?」

「はあい!」

絵麻は短い腕を伸ばして、懸命におむつをずらし、雄馬のお尻の下に敷きこもうとする。

「妹」のために一生懸命お手伝いする少女の姿は、実にほほえましい光景だったが——

「んっ……」

本当は一八歳の少年である「妹」は、「お姉ちゃん」のお手伝いに、いっそう赤くなる。(絵麻にまで、おむつ交換のお手伝いをしてもらってるなんて……)

「おそろい」生活を始めて以来ずっと感じている、自分がほとんど赤ちゃんになってゆくこの感覚。まるで底なし沼に引きずり込まれてゆくようで、最初はひたすら恐ろしかったけど、いまでは心地よさすら覚えるほどだった。

食事も、排泄も、何もかもを管理され、「ママ」に全てを委ねていればいい。

何もできない代わりに、何でもしてもらえる。

いい年をして「赤ちゃん」になった姿を見られるのさえ、恥ずかしくも気持ちいい。今までは大人として、兄として、自尊心が邪魔をして認めるわけにかなかった様々なことが、「赤ちゃん」になった今ならすんなりと受け入れられた。

(もうちよつとで終わりなんだし、今だけでも「赤ちゃん」生活を楽しもう……)

そんなことを考えている間にも、おむつは雄馬のお尻に近づく。絵麻の腕の長さでは限界があったようで、本来の位置までは届かなかったが、

「ありがとう、エマちゃん。とつても助かったわ。あとはお姉ちゃんが、やっておくわね」

璃那が片手で最後の数センチを動かして、布おむつが雄馬のお尻の下へとセットされた。

「えへへ……」

褒められてうれしそうに笑う絵麻。

そんな彼女の頭を、璃那は片手で優しく撫でてから、

「ほら、エマちゃん。エマお姉ちゃんが、おむつを手伝ってくれたわよ。優しいお姉ちゃん、よかったわね」

「んっ……あ、ありがとう、エマおねーたん」

「どーいたちまちて！」

背伸びした口調で言う絵麻に、雄馬は赤くなる。

璃那はくすくすと笑って、

「じゃあ、お尻を下ろすわね」

「んっ、うんっ……」

雄馬が小さくうなずくと、ゆっくりとお尻が下ろされてゆく。

そしていつもの倍もの厚みをもったおむつの上にお尻を落としたとたんに、

ばふっ、

と柔らかくふんわりしたおむつの感触に、

「ほっ……」

と思わずため息を漏らした。

枚数が多いせいでお尻が浮き、いつもよりも違和感があったが、それでもはや慣れ親しんだ安堵感をおぼえてしまう。

「んふふっ、いっぱいおむつを当てると、気持ちいいでしょ？」

「うん……ふかふかおむつ、気持ちいい……」

いつもの倍の量とあってふかふか度も倍、恥ずかしさと気持ちよさも倍だ。

特に数日前、シヨーツにミニスカートで外出したり、人前で下半身を露出した頼りなさを思うと、恥ずかしさよりも安心感のほうが先立ってしまう。

「んふふっ、よかった。それじゃあおむつカバーも、当ててあげるわね」

璃那は小さく笑いながら、横羽を引つ張っておへその下で固定し、前当てをかぶせる。枚数が多いためかいつもよりもかなりきつく、左右に並んだスナップは今にもはち切れそう
だ。

たっぷりと当てたおむつによって、不格好なほど膨らんだ下半身。まるで赤ちゃんの戯画のようなその格好さえも、

（ゆまたん、まんまるお尻の赤ちゃんになっちゃってる……!）

（なんて——なんて恥ずかしくて、気持ちいいんだろう……!）

羞恥と興奮に背筋を震わせ、勃起したペニスから先走りが漏れて、早くもおむつを濡らし始める。

そんな雄馬の様子に、璃那は満足げな笑みを浮かべて、

「これでよし、と。これならいっぱいおもらしても、安心ね」

「う、うん……ありがとう、ママ……」

雄馬はおずおずと、昨日から始めた呼びかけを、璃那に向かって口にする。

幼馴染の少女に向けるには、あまりにも奇妙なその呼びかけ。

しかしそれを口にする、甘い毒のような締め付けが雄馬の胸いっぱい広がって、どきどきが止まらなくなってくる。

呼ばれた璃那は嬉しそうにはにかみ、

「どういたしまして。それじゃあ、ゆまたん。ベッドから降りられる?」

「う、うんっ」

雄馬は反動をつけて、上半身を起こそうとする——が、予想以上に真ん丸に膨らんだお尻のせいで安定せず、両手を宙に泳がせて、後ろに倒れ込んでしまう。

（う、動きづらい……）

「あらあら、ゆまちゃんったら、おつきもできない赤ちゃんになっちゃったのかな?」

「う……その、おむつたくさん当てたから、起き上がれないの……」

「ゆまたん、がんばえー!」

言い訳する雄馬に、「お姉ちゃん」から励ましが飛ぶ。

「う……うん……!」

さらに赤くなりながら、雄馬は今度は背後に手をつけて起き上がる。お尻の下のおむつのせいで不安定になり、手で支えていても、ちよつと油断するとバランスを崩して倒れ込みそうだった。

そのまま前に移動して、ベッドのへりから足を下ろす。

（た、立ちづらい……!）

脚を閉じることもできないほど股間に挟まった布おむつのせいで、まるで四股を踏んで

いるようながに股になってしまう。一ヶ月にわたるベビー生活で筋肉がおちた足腰では、後ろ手にベビーベッドのへりに手をつけてやっと体を支えられている状態だ。

それでも「お姉ちゃん」からは、

「ゆまたん、えらいえらい」

「う……ありがと、えまおねえちゃん」

褒められて、恥ずかしくもまんざらでもない雄馬だった。

璃那はそんな「娘」の様子を、目を細めて眺めていたが、

「そうだ、ゆまたん。ゆまたんのお誕生日、月末だったよね？」

「えっ……あ、う、うん……」

思いがけぬ言われて、雄馬は面食らう。

雄馬の誕生日は、四月の三〇日。ちょうどベビー生活の最終日だ。「おそろい」を始めたときにきちんと覚えていれば、「せめて誕生日くらいまともに迎えさせてほしい」と交渉していただろうが、今の今まですっかり失念していた。

(お誕生日も、赤ちゃんのまま過ごすことになるんだ……)

情けないような、でも悪くはないような、奇妙な気分を噛み締める雄馬。

しかし次に璃那が口にした言葉は、雄馬の想像をはるかに上回り――

「だからね――最後に、お誕生日会をしましょ？」

(試読版は異常になります。続きは製品版でお楽しみください)